中世日本文学史

有斐閣双書

中世日本文学史

有吉　保編

＊入門・基礎知識編＊

有斐閣双書

編者紹介

有吉保（ありよしたもつ）

昭和2年　福岡県生れ

昭和26年　日本大学法文学部卒

現在　日本大学文理学部教授

主著　『新古今和歌集の研究　基盤と構成』（昭和43，三省堂）

『千五百番歌合の校本とその研究』（昭和43，風間書房）

『歌論集』（日本古典文学全集，共著，昭和50）

有斐閣双書

中世日本文学史　　定価 1,200円

昭和53年 5 月10日　初版第1刷発行
昭和59年 4 月10日　初版第2刷発行

編　者　有吉保

発行者　江草忠敬

東京都千代田区神田神保町2～17
発行所　株式会社 有斐閣
電話 東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕 振替口座東京6-370番
京都支店〔606〕 左京区田中門前町44

印刷　株式会社共立社印刷所・製本　稲村製本所
© 1978, 有吉保. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-641-09881-6

はしがき

本書は、大学および短期大学における中世文学史のテキストとして編まれたものであるが、兼ねて広く日本の中世文学に関心のある読者のことも考えて用意したものである。全体の章立て構成は編者の責任においてなしたものであるが、各章の叙述は、それぞれの担当者の全く自由な立場において執筆されたものである。

一般に中世といわれる時代は、宮廷貴族の斜陽化する社会であって、既存の文学を継承し発展させたという一面と、動乱と変革によって生まれた新興の階層に支援されて新しい文学が興ってきたというもう一つの面とがあるように、複雑多岐にわたるのがこの時代の文学である。したがって認識や把握の仕方によって、この期の諸作品の評価や背景に大きな相違が生ずるものである。単なる時限的区分や作品と社会を短絡的に結合させることは、極めて危険な方法であるという反省から新しい角度からの再検討が必要とされている。そして、それに対応する新しい段階の解明がなされつつある。

本書は、多角的に進められた最近の文学研究の成果を踏まえ、連続した時間の体系に位置づけるという基本的な文学史の方法論の姿勢を再吟味するため、敢えてジャンル別に執

筆する方法を選んだのである。本書の時代設定は、一応、鎌倉時代初頭から、徳川幕府開設の頃としたが、前述のような意図から、上・下限は自由に考えていただき、設定した時代には新しい視角で言及するという共通の場をもつこととした。

本書は入門書としての性格をもたされているものの、新しい視点の文学史を志向した。そして、各分野に応じて九人の方々に執筆をお願いした。幸いに、編者の意図に賛成された執筆者の協力を得ることができ、当初に意図した成果をあげることができた。ご多忙中、しかも限られた紙数にもかかわらず、それぞれに充実した内容の原稿をお寄せ下さった各位に深謝するとともに、年表作製・挿絵掲載に協力を賜わった方々に厚くお礼を申し上げる。また、有斐閣編集部の澤井洋紀氏には、編集上いろいろな援助をうけたことも、あわせて感謝申し上げる。

昭和五三年四月

有吉　保

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

執筆者紹介（執筆順）

有吉　保（ありよし　たもつ）
日本大学文理学部教授

島津忠夫（しまず　ただお）
大阪大学教養部教授

福田秀一（ふくだ　ひでいち）
国文学研究資料館教授

桑原博史（くわばら　ひろし）
筑波大学文芸・言語学系教授

安井久善（やすい　ひさよし）
日本大学商学部教授

梶原正昭（かじわら　まさあき）
早稲田大学教育学部教授

米倉利昭（よねくら　としあき）
佐賀大学教育学部教授

三木紀人（みき　すみと）
お茶の水女子大学文教育学部教授

徳江元正（とくえ　げんせい）
国学院大学文学部教授

伊藤博之（いとう　ひろゆき）
成城大学文芸部教授

目　次

はしがき

第1章　和歌文学……有吉　保　1

1　中世和歌の始発――鎌倉初期

中世和歌の起点(1)　新古今歌壇の形成(3)　後鳥羽院と『新古今集』(8)　新古今調と歌人(8)　定家と『新勅撰集』(11)

2　鎌倉中期の和歌

為家と勅撰集(13)　為氏と『続拾遺集』(15)　御子左家の分裂と勅撰集(17)　二条為世と『新後撰集』(17)　京極為兼と『玉葉集』(17)　『続千載集』・『続後拾遺集』(18)

3　南北朝期の和歌

後期京極派と『風雅集』(20)　二条派の復活と『新千載集』・『新拾遺集』(21)　『新後拾遺集』(24)　私撰集について、『藤葉集』・『安撰集』(24)　南朝歌壇と私撰集(25)

4　室町期の和歌

飛鳥井家と『新続古今集』(26)　二条派（兼良・堯孝・常縁）・京極派（正徹・心敬）の門流(28)　歌道伝授の血脈(29)　安土・桃山期の和歌(31)

〔資料〕　新古今集、金槐集、新勅撰集、続後撰集、続古今集、玉葉集、風雅集、新葉集

第2章　連歌……島津忠夫　38

連歌の起源(38)　短連歌の完成(38)　鎖連歌の発生(39)　鎌倉時代初期の連歌(40)　賦物(41)　順徳院の連歌論(42)　鎌倉中期の連歌(42)　式目(43)　地下連歌師の登場(43)　鎌倉末期の連歌(44)　二条良基(44)　救済の新風連歌(45)　南北朝連歌の位置(46)　応永・永享期の連歌(47)　北野会所奉行と宗匠(47)　宗砌(48)　心敬と『ささめごと』(48)　宗祇の登場(49)　『新撰菟玖波集』の成立(51)　肖柏・宗長・宗碩(51)　宗牧と宗養(52)　俳諧連歌の発生(53)　宗鑑と守武(53)　紹巴とその以後(55)

〔資料〕　菟玖波集、ささめごと、竹林抄、水無瀬三吟、誹諧連歌、守武千句

第3章　日記・紀行・随筆文学……福田秀一　60

1　鎌倉初期の日記文学

日記・紀行と随筆(60)　『建春門院中納言日記』と『建礼門院右京大夫集』(61)　『源家長日記』その他(63)

2　鎌倉中期の日記・紀行

『海道記』・『東関紀行』など(64)　『弁内侍日記』と『中務内侍日記』(65)　飛鳥井雅有の日記(66)　『うたたね』と『十六夜日記』(67)

3　『とはずがたり』

『とはずがたり』とその作者(68)　梗概と主題(69)　特異な体験と物語的虚構性(70)

4　南北朝期以後の日記・紀行文学

『竹むきが記』(71)　南北朝・室町期の日記・紀行文学(72)　漢文日記の問題(73)

5　随筆文学

『方丈記』と『無名抄』(74)　『徒然草』(76)　歌論随筆類(77)　『ひとりごと』と『老のくりごと』(78)

〔資料〕　建春門院中納言日記、海道記、東関紀行、うたたね、十六夜日記、とはずがたり、竹むきが記

第4章　物語文学……桑原博史　82

擬古物語(82)　『しのびね物語』の場合(84)　『風葉和歌集』前後(86)　南北朝から室町時代へ(89)　お伽草子の世界(91)　お伽草子の庶民物(92)　お伽草子と絵(94)

〔資料〕　酒呑童子、福富草子、文正草子

第5章　歴史物語……安井久善　100

歴史物語とは(100)　『水鏡』(101)　『秋津島物語』ほか(103)　『増鏡』(103)　『梅松論』と『吉野拾遺』(105)　『南方紀伝』・『桜雲記』(106)　『信長記』と『天正記』(108)　『愚管抄』(110)　『神皇正統記』(111)

〔資料〕　増鏡、梅松論、吉野拾遺、愚管抄、神皇正統記

第6章　戦記物語……梶原正昭　116

戦記物語の概念(116)　戦記物語のめばえ——『将門記』・『陸奥話記』(116)　戦記物語の新

展開――『保元物語』・『平治物語』(118)　新しい人間像の形象(121)　戦記物語の達成――『平家物語』(122)　『平家物語』の組織と特質(124)　『平家物語』の基調精神(128)　『平家物語』の生成(130)　『承久記』の世界(133)　南北朝動乱の戦記――『太平記』(134)　『太平記』の叙事精神(136)　『太平記』の政道批判(139)　後期戦記のひろがり(140)
〔資料〕　将門記、保元物語、平家物語、承久記、太平記

第7章　演　劇……米倉利昭　146

1　日本演劇の夜明け
平安の庶民芸能(147)　庶民芸能の発達(147)　日本演劇の夜明け――中世(148)

2　田　楽
田楽の芸態(149)　将軍の愛好(149)　田楽の名人たち(150)　田楽の衰退(151)

3　能
猿楽座の形成(151)　観阿弥の台頭(152)　観阿弥の京都進出(152)　観阿弥の死と芸風(153)　観阿弥作能の特色(153)　世阿弥の誕生(154)　貴族社会の中の少年世阿弥(155)　観阿弥の死と観世座(155)　世阿弥の変貌(156)　複式夢幻能の創作(157)　悲運の晩年(157)　能の製作(158)　脇能の位置づけ(158)　鎮魂の詩――修羅能(159)　王朝世界への郷愁――女能(160)　世阿弥の芸論(160)　世阿弥以後の能(161)

4　狂　言
初期狂言の姿(162)　矢田猿楽の事件(162)　狂言の番数(163)　『天正狂言本』の位置(163)　日吉方五郎による狂言集成(164)　流派の鼎立(164)　狂言の製作(165)　狂言の性格(166)　狂

言の芸論(167)　『わらんべ草』(167)　消えゆく狂言師たち(167)

5　幸若舞

曲舞から幸若舞へ(168)　幸若舞の曲(169)　幸若舞の衰退(170)

〔資料〕　平安時代田楽の芸態、田遊び（御田舞）の歌、田楽の能の台本、卒都婆小町、高砂、井筒、風姿花伝、天正狂言本・木のへ殿の申状、大蔵虎寛筆狂言本・柿山伏、大江幸若舞の本・八嶋

第8章　説話文学……三木紀人　175

説話の時代(175)　二つの原点的書物(176)　『宇治拾遺物語』(178)　『発心集』と『閑居友』(181)　中国説話への関心(183)　いくつかの教訓的説話集(185)　貴族説話集(186)　『古今著聞集』(186)　説話集の自照性(189)　その他の仏教説話集群(190)　無住の作品(191)　『徒然草』とその時代以後(194)

〔資料〕　宝物集、古事談、宇治拾遺物語、発心集、今物語、古今著聞集、沙石集、雑談集

第9章　歌謡文学……徳江元正　200

小歌の時代(200)　今様(202)　和讃(206)　早歌(209)　小歌(213)

〔資料〕　綾小路俊量卿記、体源鈔、梁塵秘抄、三帖和讃、宴曲集、閑吟集

第10章　法語・漢詩文……伊藤博之　220

1　法語と文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

法語の概念(220)　法語の成立(221)　法語と文学の接点(222)

2　仏説による人間認識の深化

実存的不安を見つめる心(223)　厭離穢土・欣求浄土(224)　煩悩具足の人間(225)　階層序列的な人間観を超えるもの(226)　悪人正機の意味するもの(227)

3　仏性の自覚と人間

一切衆生、皆仏性なり(229)　三界は皆仏国なり(230)　仏もわれもなき無我の世界(231)

4　五山文学

禅林文学の勃興(232)　官寺を中心とした文運の隆昌(233)　詩禅一味の論(233)

〔資料〕　一枚起請文、自然法爾の事、現成公按、土籠御書、興願僧都にしめしたまふ御法語、空華集、寂室和尚語録、狂雲集

参考文献……238

中世文学略年表……作製　青木賢豪　245

事項索引・人名索引……巻末

第1章　和歌文学

有吉　保

1　中世和歌の始発——鎌倉初期

中世和歌の起点

中世和歌の出発点を、どのあたりに置いて考えるかは、他の物語・戦記・説話文学などの時代区分の問題と同様に、問題点も多く、諸家による見解の相違の多くみられるものである。この問題を少し具体的に示してみると、題詠歌意識の固定化という観点から、『金葉集』（大治二〈一一二七〉頃完成か）・『詞花集』（仁平年間〈一一五一～五三〉成立）あたりに置くものと、和歌史における歴史意識の明確化ということから、『千載集』（文治四〈一一八八〉）にみるというように、視点や認識の問題と深く関わっており、文学史という学問の性格からも当然予想される問題点である。『金葉集』を一つの曲折とみる場合の一つの立場として、源俊頼（天喜三～大治四）の和歌認識に革新的なものがあり、「おほかた歌のよしといふは、詞を飾りて詠むべきなり」（『俊頼口伝』）と、詠歌の芸術意識の発見をなしているのである。すなわち、俊頼の和歌認識が、三代集や『後拾遺集』の王朝的認

識のそれと異なる点を一つの区切りとして認めて中世和歌の出発とみるのである。

次に、俊成（永久二～元久元）の撰進した『千載集』あたりに、その区分を認めるのは、「歌はただよみあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にもあはれにも聞ゆる事のあるなるべし。もとより詠歌といひて、声につきて善くも悪しくも聞ゆるものなり」（『古来風躰抄』）と俊成自身が述べているように、歌は珍しい素材や明確な説明に本義があるのではなく、優雅な美や、しみじみとした情緒にあり、さらに歌の声調を重んじたのである。この声調が単なる声調ではなく、歌の中のリズムであり、『新古今集』に多く継承されているイメージのリズムでもあった。ところで、俊成がこのような発言をしえたのは、和歌史観をもつことの重大さを俊成が自覚したからである。彼の唯一の歌論書『古来風躰抄』（建仁元頃成立）の書名が、『万葉集』の古より、今に到るまでの時世の変遷してゆくのによって、風躰も表現も改まってゆくようすを書いたことによるように、史観をもつことによって、和歌の叙情の変質に気付き、和歌的叙情の復活の必要性を痛感したのであった。

平安末期から鎌倉初期の歌壇は、公任―基俊の三代集に連なる伝統的歌境を継承する清輔―顕昭と続く六条藤家の路線と、俊頼の革新的な新趣向を摂取する俊成に代表される御子左家との対抗があった。しかし、『千載集』が俊成の手によって撰進されたことによって、その主流が変貌をしはじめていた。この理由によっても、ここに中世の起点を想定することもできる。

前述のように、芸術意識や歴史意識の位相によって、その区分を把握し和歌史を論ずることができるし、和歌史は本来そのような捉え方をすべきものであろうが、本稿は、勅撰集を中心に据えて、中

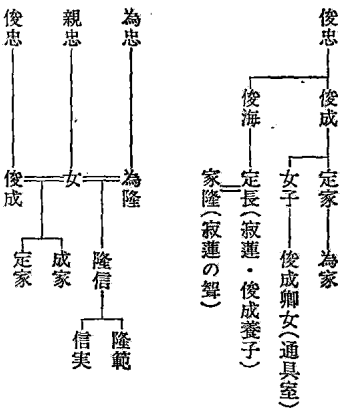
世の和歌史（鎌倉―安土・桃山）を捉えたい。中世和歌史は、歌人の集団化と同時に、政権とも結びついて展開してきたものであるし、勅撰集撰進という形をとって顕われていると認められるので、歌壇の指導者と勅撰集という角度で、各項に区分して言及することとした。

〔参考〕なお、中世和歌史の区分については、福田秀一『中世和歌史の研究』（昭和47、角川書店）中の第一編総論五「中世和歌史の時期区分」に従来の諸説が整理されて掲げられている。

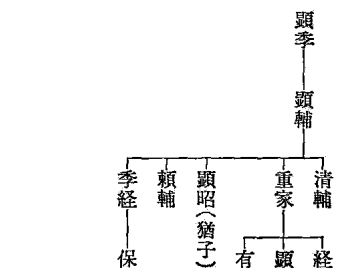
新百今歌壇の形成

中世初期、つまり建久初年の歌壇の動きは、俊成を中心に、定家（応保二～仁治二）を革新の旗手として、新しい歌境を求めて色々な試みがなされていた。こんな定家らの試作に対して、世人は「達磨歌」と揶揄して呼んでいた。象徴的幽玄の新風が理解されなかったのである。こうした詠作活動は、「百首歌」の盛行という形でみられる。特に、その代表的なものとして、建久元年（一一九〇）九月一三日夜、良経（嘉応元～建永元）の九条邸で披講された『花月百首』がある。良経・慈円・有家・定家・寂蓮・丹後などが、花五十首、月五十首を詠んだものである。この権門の良経と革新の旗手定家の若いコンビは、一つの新しい試みをした。これが『六百番歌合』（建久四）である。主催者は左大将であった良経であるので、『左大将家歌合』とも呼ぶが、良経の背後には父の九条兼実（久安五～承元元）がいた。兼実は、政治的に源頼朝と結んでおり、京都公卿側の代表であり関白太政大臣の権勢をもち、日記『玉葉』で知られるごとき多識で、和歌を六条清輔・俊成に学び、建久期歌壇の六条藤家・御子左家の庇護者であったわけで、歌会、歌合を主催したためこの活動の一時期を九条家歌壇と呼んでいるほどの和歌愛好者であった。この『六百番歌合』は、兼実の弟の慈円と、息

御子左家略系



六条藤家略系



子良経を中心に、六条藤家の季経・有家・顕昭・経家、御子左家の定家・隆信・家隆・寂蓮など一二人が加わり、四季五十題、恋五十題で、歌題としてもやや珍しいもの（特に恋題は前例がない）を含ませており、判者は俊成であった。また、方人達の発言である難陳は、詠歌・鑑賞態度も推察され、俊成判詞の歌論的意義と同様に重要である。対立する六条藤家派と御子左家派の激突は、新風の御子左家派が優秀な成績を収め、これに対し六条藤家の顕昭が『六百番陳状』を記し激しく反駁している。これには、六条藤家全体に通じる歌論が推量されるもので注目される。

建久七年（一一九六）のいわゆる「建久の政変」は、九条兼実・良経が政治的に失脚することであった。これは歌壇の動向にも変化を起こした。討幕派の内大臣源通親（久安二～建仁二）が兼実に代わるのである。通親は、六条季経に和歌を学んでおり、六条藤家も良経・定家の結合に反撥している関係上、六条藤家を庇護する事になり、建久末年からは、通親と復活してきた六条藤家の活躍がみられる。このグループは、歌聖人麿の影像を祭る「影供歌合」をしばしば催しており、一つの流行をきたした。なお、通親も文学愛好者で才にも恵まれていたことは、『高倉院厳島御幸記』・『高倉院升遐記』の著があることによっても知られる。

建久末年には、他に仁和寺グループの活動をみることができる。建久九年（一一九八）末頃に催された『守覚法親王家五十首』がそれである。顕昭あたりの発案かと推測される歌会であるが、この出詠歌人をみると、六条藤家系では、季経・顕昭・有家・生蓮（師光）、御子左家系では、俊成・定家・隆信・寂蓮である。さらに、仁和寺の関係として、守覚・覚延・賢清・禅性・勝蓮（現存五十首にはみられないが、『御室撰歌合』から推定）が知られ、その他の歌人実房・隆房・兼宗・公継も仁和寺と関係の深い権門・交友であり、六条藤家とも縁のある歌人であった。総勢一七人の五十首歌で、これを資料として、翌翌年の正治二年（一二〇〇）二月『御室撰歌合』が結番された。ここにも、仁和寺を中心とする歌人グループをみることができる。

建久九年一月、土御門天皇即位となり、倒幕派の通親は外祖父の地位を収め、忽ちに禁裏・仙洞の実権を掌中にしたらしい。後鳥羽院（治承四～延応元）も仙洞に入り院政が始まるのであるが、前に述べ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com